

神奈川県立金沢養護学校



学校だより

第45号 平成22年12月22日

キャリア教育 (5)

副校長 渡邊昭宏

現在私たちの周りには情報や刺激があふれています。そのなかから自己選択・自己決定の判断に必要な情報を捜し出すには、いかに**今必要ない情報や刺激を捨てられるか**（無視できるか）にかかっています。例えば赤信号や近づいてくる車に注視するには目のまえにある看板などの景色を捨てないと浮かび上がってきません。音も同じです。車の騒音や街の喧騒のなかにも、身の危険を知らせる音や声が聞き取れないと命の保障はありません。つまり『捨てる技術』が社会で生活していくうえで大切な「生きる力」となってきます。例えば勉強や仕事に集中しているときは雑音や窓の外も気になりません。実際は耳や目に入っているのに、知らず知らずのうちに、今はそれを聞いたり見たりしないようにしようという「強い意思」が働いて、脳が今必要な情報や刺激だけを選択しているのです。集中できない、気が散りやすいというのは、実はこうした**情報や刺激の整理整頓**、ひいては**部屋や気持ちの整理整頓**が難しい状態だといえます。

それを育むための二者択一という学習は、本人の意思を引き出したり、自分で決めさせる最もシンプルな方法だといえますが、こればかりをしていると、誤った答えや嫌いなほうを捨てた結果残ったほうを選んでいるのか、正しい答えや好きなほうだけに目がいつて選んでいるのかを周りが判断できません。そこで少しずつ選択肢を増やしてみます。それも同時に示さず、ひとつひとつ見せて（示して）いきます。そうすると、これは違う、これも違うという判断を繰り返して「これだ」というものを見つけ出さなくてはならなくなります。捨てられないとひとつひとつの選択肢にこだわっていつになっても先に進めなくなることから、不要な情報や刺激を捨てることの大切さを学んでいかれます。

集中できない人や、気が散りやすい人には、時間・空間といった物理的環境を構造化して、情報や刺激を制限してから提供することが教育的支援だといわれてきました。しかしそれで学習が完結していたら、卒業後も一生涯、世間（地域社会）から遮断された理想空間の中だけで生きていくことを強いる結果になるかもしれません。学習は整理された環境で行われても、そこで学んだことがさまざまな人とさまざまな場所で実現できてこそ学習した意味があります。限られた環境のなかでしか通用しない知識やスキルは「生きる力」とはいえません。集中の妨げになる情報や刺激をひとつずつ増やして、それを捨てる（無視する）ことができるようにして卒業させなくてはならないのです。

実はこのことが「嫌なことは拒否する」「甘い誘いに乗らない」「人の言いなりにならない」「デマや噂を鵜呑みにしない」「必要以上に買わない」といった、**間違った情報を捨てる（無視する）基礎力**となり、犯罪に巻き込まれたり、人権を侵害されたりすることから自分を守る力を育てることへとつながっていくのです。 （次回につづく）